

モンスターに好かれし
者 ～日記風にしたかつ
た～

暁月神威

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある村に……いや、ある森の中にモンスターに囲まれて笑って遊ばれてる者がいた。

そいつは、何故かモンスターに好かれる体質だった。だが、そいつの周りには回復薬などが沢山転がっている。そう、好かれるがその分モンスターに遊ばれてるのだった。しかもその中には雷狼龍ジンオウガや迅龍ナルガクルガなどもいる。たぶん。

まあ、色んなモンスターに囲まれているのに変わりはない。あ、あと、その者を村のみんなは「あー、あいつね。あいつさえ居ればモンスターに村を壊されないから、本当に助かるよな。」となど言われていて、そこまで印象は悪くないようだ。

その者の名は 月擘（シスイ） という。 一様男だ!!

皆さん、この作品はしばらく投稿を停止させていただきます。本当に勝手ながら停止する事に決めましたのをここに記します。

目次

初日？ 頑張って書こう！ b y 月彗

1

二日目っ！ しばらくマイページ何て

見てなかった b y 作者 ————— 4

3日目っ！ 読み専生活してました b y 作

者 ————— 8

4日目っ！ 待たせたな！ b y 月彗

13

初日? 頑張って書こう! b y月彗

○月×日 1日目

まず、いきなりだが、今日から書こうと思つた理由を言おうとしよう。理由は二つある。

一つ目は「あれ? 昨日何食べたっけ? ああ、もう何でもいいや! サシミウオでも食べよ!」と言うの、一ヶ月ずっとやっていた事があつたから! くそっ! 目の前にアプトノスがいつばいいいたのに何故に同じ魚を食べ続けたのか俺でもわからない! ア、ア、ア、ア、ア、ア!

それは置いといて! もう一つは、「今のままじゃ、モンスターとしか友達になつてない! いつか出来るだろう人間の友達と交換日記するために練習しとこ!」と言う事だ。ぶつちやけ村に行くと、「あつ珍しく月彗がいるぞ! 森のお友達(笑)はどうした?」とか、「あつ! 月彗さん来てたんだ! やりい! 俺の当たりね! 釣竿買ってよね! ポロ釣竿前に壊れちゃつたから丁度いいや!」やら、「わっ! しつ、しすいさんだ。よし! 今日こそ言うんだ! 頑張って誘うんだ! / /」等などの話をしている。一つ言わせてくれ。一体僕が何をしたと言うんだ! 僕は! 何で子供の賭け道具見たいになつてるんだ!

ちきしようめ！ア、ア、ア、最後の人に至っては僕をサンドバックかなんかと間違っていない!? そのあとはどうしたかつて? そりや怖かったのですぐ逃げましたが? 後ろをちらつと見たら何かスゴく寂しそうに笑ってたよ。そりやストレス発散出来なくて残念だろうけどそんな顔しないでよ! こつちが悪い事したみたいな気持ちになって死にたくなるからやめて欲しかった! 以上!

ここまで書いて思ったことがあるんだけど、僕は誰に説明してたんだろう。これがこの駄作の主人公としての運命だと言うのなら僕は主人公の座なんか降りてやりたい! うん。どこからか、へだか断る!〜と言う言葉が聞こえた気がする。

まあ、おいというて、僕にはモンスターの友達がいるって言いましたよね? まだ、ぜんぜんモンスターに会ったことないですが、最近出会ったモンスターが数匹いて、その中の一匹が本当に優しいんですよ。村では「アイツがいるぞ! 気をつけろ! 襲われるぞ!」などと言われていますが僕はそんなことないと思いますかね? 何故かつて? それは、僕がある日天気の良い日に森を歩いていたら、大きな切り株があり辺り一面が広い空間で、緑が沢山ある開けた場所に出たんだ! そこは溪流の所から行けて、案外安全そうだなっておもったのです。その開けた場所の真ん中らへんで寝転んで見たわけです。そうすると、森? の香りと涼やかな風が流れてきてうっかり眠っちゃったんだ! 気持ちよかったよ! そこから、数時間かな? 寝ただけで、ちよつと寝苦しくなつて

起きたんだよ。そしたら目の前に青くて大きな熊が居たんだよ。最初は食われる!? っ
て、怖かったけどいつの間にか背中に乗るまでに仲良くなってたんだよ! それももう、
主従関係を結んだんじゃないかって位! : : : ってあれ? 違うか? まあとにかく仲良くな
ったんだよ! そこから、何とか言葉を分かって貰える位までは仲良くなりました。
ちゃんちゃん!

あ、あと数匹いるけど、それは明日話すことにするよ! じゃ、このくらいでいいの
かな?

二日目つ！ しばらくマイページ何て見てなかったb

y作者

○月×日 二日目

やあみんな！お久しぶりだね？月慧だよ！え？誰だつて？詳しくは説明を読んでね？… すいません。調子に乗りました。ここの作者が最近だらけ過ぎて投稿何て全然忘れてモン〇トやってたんだよ。

それは置いといて、今あるモンスターに乗ってんだけど物凄い怖いんだ。何が怖いかつて？それは何よりいつ落とされて、いつ食われるかなって考えてると体が震えるほど怖い。それにハンターさんもギルドの皆さんも何か心なしか（アイツ、やべえよ。人間じゃないんじゃないか？）みたいな目で見てるんだけど… しかも、そのモンスターは、地域一帯のモンスターを喰らい尽くすことで生態系を崩壊させてしまうと言う、恐暴竜イビルジョー という。さて、皆さんはこんな凶暴なモンスターと仲良くなれると思わないと思いますか、重要な事を忘れてませんか？これは作者の妄想であり、フィクションなのでありますよ？だから、僕は原作の設定は少し残しつつ原型の内容を崩壊してこの作品を作っているよ！… つは！今何かよく分からない奴に取り憑かれたよう

に喋ったかもしれない。許してくれ。これで最後だ……です。とりま、仲良くなった経緯を話しますかね。

暗い夜の中、お腹が空いて森の中を彷徨ってただけど何故かモンスター、それに魚なども姿を消していたんだ。僕は、気になつて森の奥にどんどん進んでいったんだ。そうすると前からケルビが前から、何かから逃げる様に、走つて来ていた。それを狩ろうとしていた僕は、そりゃ驚いたさ。何だつて前から物凄くデカイ、手足の生えたゴージャグが走つてきたと思つてね。まあ、そのあとにあれ、イビルジョーじゃね? つて思つたらその通りだったんだけど、あつちもお腹が空いてたのか僕を見て一瞬にして食いに来たんだけど、まさかのまさか、火竜リオレウスが来て暴れ出して来たんだ。そしたら僕のことなんか目もくれずリオレウスに突っ込んで行つたよ。そしたら一瞬でカタがついたよ。勝つたのはだつて? もちろんイビルジョーだったよ。そしたらイビルジョーはまた僕を驚かせてきたのだよ。それはなんと、リオレウスの肉を僕にくれたんだよ。あのイビルジョーがだよ? 僕は驚いたけど一心不乱にリオレウスの肉にかぶりついたよ。案外美味しかった事をここに誓う。僕からしたらね? そしたらイビルジョーがお腹が膨れたのか、僕の目の前に来て寝始めたんだよ。イビルジョーにつられて僕も寝てしまったんだだけね。まあ、起きたら日が登つてイビルジョーの背中に乗つてたんだ

けどね。まあ、イビルジョーの背中では意外と乗り心地は悪くなかった。まあ、そんなぐら
いかな。じゃあ、話は戻るよ。

そんなこんなで仲良くなつて、イビルジョーに乗って村に来ただけど、モンスター
は入れないって言われて仕方がないからイビルジョーには帰ってもらった。今度ガノ
トトスの肉でもあげよつかな。あれ、意外と美味いし。それと、村の中に入って散策し
てたら、1日目の時にいた例の女の子に話し掛けられた。

「あつ、あの。しすいさ、さん。ききのうは、言えませんでしたか、あ、あの一緒に森に、
つ、つれてつてく、ください…！」

と言われ僕は悔い改めた。こんなにも勇気を出して話しかけてくれた女の子を、昨日
やその前も勘違いして逃げてしまった僕に、僕は話してその人の人柄に触れてみるこ
とをして見ることにする。おい、誰だ！ちよろいなコイツとか思った奴！…まあ、僕は
その人のためにも、勿論OKといった。そしたら、その女の子はポカンとした顔で僕を
見てきた。そして、段々と顔を真っ赤にしていき遂には湯気でも出るんじゃないかって
位になっていた。僕は調子に乗って頬を撫でながら言った。「大丈夫？森に行ってもい
いけど体調はしつかりしてくださいね？心配だからね。」と。

そしたら今度は気絶した。ホントにこればかりは、分からない。カツコイイこと
も、なんも言っていないのに気絶したってそんなに嫌だったのかな…と思ったよ。こ

の時は。まあ、その子を家に送って帰ったけど、しばらくは森から出れないかも知れない。何でからって?送っていった時にその子のお母さんに言われたんだよ。「あらあら、こんな昼間から倒れちゃって。月彗さん。この子を宜しくね?」なんて言われてしまった。ははっ、勘違いしてやがるぜ。まあ、僕は恥ずかしくなって、強引に訂正して走って森に戻って来たけど。もうなんか恥ずかしい。しかもお母さんだけじゃなくて他の人にも言われながら送っていったんだからトドメを刺されたもんだよ。勘違いをしてしまうじゃないか。あの母娘美人だから余計に恥ずかしいですよ。まあ、楽しかったです、チョットだけ嬉しかったからいいんだけどね。…まあ、今日はこれくらいでいいのかな?明日は誰とどんな話をするのか。それは作者による作者によつて作られる妄想だからさ、正直僕は分かっているんだけどね。

3日目つ！読み専生活してましたby作者

○月?日 三日目

いやあ、待たせたな！（蛇感）月彗だよ！え？誰だつて？う、嘘だよね？まあ、忘れても仕方ないぐらいに放置してたからなへメタ発言止めて！作者のライフはゼロよ！～みたいな事が聞こえたが知らない。

まあ、それは置いておいて昨日の勘違いされた件のことで現在村に帰れない僕です。少し、森に急いで逃げた時の話をしよう。あ、現在その時に出会った迅竜ナルガクルガに乗って風になってるよ。H A H A H A！楽しいなアー。ハンターさんは、諦めた様子で焼肉セットで肉を焼いています。とりあえず、回想どうぞ！（言つてみたかった事のひつつ）

少し時間が経ち、日は落ちてきてちやうど茜色の空になっていた。その時僕は、溪流で腰を下ろして落ち着こうとしてただけど、どーしても落ち着かなかったんだ。何故か？当たり前だろう。美人の母娘に勘違いされて、宜しくなんて言われたんだから！え？チョロい？仕方ないじゃないか！今まで女性と話したことないんだから！やだもー

！恥ずかしいし、村のヤツらも妙に優しい目で見てきやがって、しばらく村に戻れないじゃないか：とりあえず！その時、夕飯の為に釣りをしてたんだけど空から黒い影が見えて、様子を伺ってたらナルガクルガが降りてきたんだよ！勿論、お約束の友達になる（強制スキル）のおかげでなかよくなっただけど、そこからが問題でさ。ナルガクルガを討伐しようとクエストを受けてたハンターらしき人物が何を勘違いしたのか僕が襲われてると思つたらしく「大丈夫!?危ないのになんで森なんか来たの？死にたいの？」とか言われちゃって何とか誤解をとくために説明してたら今度は「え？ご、ごめんなさい：：。てゆうかモンスターと絶対仲良く慣れてしまふスキル!?だから、この辺のモンスターは大人しいんだ：：。って、え!?もしかしてこの森の番人って言われてる月彗さん!?」うんそうだよ。ところで番人ってwと思つてたら凄い勢いで謝られた。なんでさ。聞いてみたところ「ギルドでは月彗さんの友人?：：。まあ、友達を傷つけたら古龍を率いてそのハンターを消滅させられるって噂になっていました」と言われた。さすがに僕でも笑えなかった。なんとも言えない空気になった。その空気の中、自分を忘れるなど言うように鳴いた。ほう、このナルガ甘えん坊だな?と思つた瞬間尻尾でどつかれた。ふむ。ツンデレだったか：：。と思つたところ口に出していたらしくハンターさんに苦笑された。あ、このハンターさんは女の子らしい。名前はリエル・テンペストラらしい。意外なことについて先程戻りにくくなつてしまった村の村長の妹さんらしい。運命

の出会いというものだなとボソツ言うともたもや聞かれてしまったらしくリエルさんの顔は真っ赤に染まっていた。どのくらいだつて？希ティぐらい。あいつ元気にしてるかなあ。と、虚空を見上げてたらナルガに顔を舐められた。悔しかったので撫でてみた。見た目道理に肌触りは良かったが嫌がられた。ので、顎の下を撫でてみると気持ちよさそうにしていた。こいつ猫か!!と思っていると、リエルさんが復活した。ので、からかつて見ると可愛い反応が見れた。「な、なんですつて!?!ちよろイン?誰がチョロいですか!いきなり運命の出会いとかなんとか言うからびつくりしただけです!べつ、別に意識してしまったとかではありませんですからね!勘違いしないでよね!」と、ツングレ頂きました。ほんとにこの言葉使う人いるんだなあ。と思つていたら、リエルさんが空を見た。すつかり空も暗くなり月が出ていて夜になっていた。そこで、リエルさんが慌てた様子で「帰らなきゃ!兄ちゃんに怒られる!」とあわあわした様子でパニックっていた。そこで一緒に帰るか提案すると、申し訳なさそうにしながらもよろしくと言われたので、送つていこうとした。そうしたら、ナルガが乗つてけとばかりに尻尾で僕を叩いた。ので、その提案に乗るとリエルさんが少し落ち着いた様子で背中に乗つたそのあとに僕が乗つて、準備終わりを知らせるとナルガ飛んで村まで滑空をしようとした。そうしたら風が急に強くなりだいぶ流され何故か水没林に着陸した。既に時間は真夜中に突入したようで、月が真上にあつた。戻るにも時間が遅く村人にも迷惑が

かると言うことで断念し、明るくなったら戻ると決めた。リエルさんは、最初は戻ろうと言っていたが迷惑がかかる。それならベースキャンプに行つて明るくなるまで待つた方がいいと言うと、「…わかった」と、諦めた様子で納得してくれた。ナルガは、ベースキャンプに入れないので水没林の寢床に行つてもらうことにした。

で、今に至るよ!あゝ…よく考えたらこのベット一つだけじゃん…と思つていると、同じ考えに至つたのかりエルさんは顔を赤く染めていた。そしてポソポソ喋つていた。聞こえないので聞き流していたらいきなり立ち上がつて「わ、私は別にいつしよでもいいですよ」と、だんだん小さくなつていきながらも、提案してくれた。僕はその提案にのり早々に寝に入る事にした。そのあとの記憶はないが、多分リエルさんは少しあとにベットに入ったのだろう。なぜか?とても…暖かかったです。起きてました。寝れるわけねえだろ!?恥ずかしくて寝れねえよ!キヤラ違うつて?そりや作者が深夜テンションで書いてればそうなるさ!へメタイからやめて…?なんか作者が言っているが知らない。まあ、それからモヤモヤしながら過ごしていたらいつの間にか朝になつていたので、リエルさんを起こしてベースキャンプの外に出たらナルガがもう来てたので背中に乗らせてもらおうと早急に村へ向かった。この時、まさかあんなことになるなんて僕は思いもしなかった…

t
i
n
u
e
d
)

)
T
o
B
e
C
o
n

4日目っ! 待たせたな! b y 月彗

○月?日

やあ! 待たせたな! (蛇感) 既にやったネタだつて? 知らないなく。まあ! 久しぶり!
(やめて! メタいからやめて!) なんて作者は言ってるけど知らない。怒ってないんだからね? とツンデレ風に月彗は言ってみたりしたりしてるのが僕月彗です。

とりあえず今日の振り返りをしようじゃあないか。

今日は大変だったよ: : : なんせまた風で飛ばされて知らない場所へ飛ばされるなんて思いもしなかったんだからね。

へ? そんなのいいから早くしろつて? 全くもう: : : せつかちなんだから!: : : うん。気持ち悪かったね: : :

気を取り直してやって行きましよう!

風で飛ばされて落ちた先は、砂漠だった。だがご都合主義のお陰で無事? ベースキャンプに落ちた僕達は幸運だろう。だが、やはり大きな問題と設定によりナルガクルガには帰ってもらった。その際リエルには「君は馬鹿なの

!? このままナルガクルガが帰ってしまったら私達は自力で帰れないんだよ!? 連れて

帰って貰えばいいじゃない！」と怒られた。だが、やはりご都合主義の作者のお陰で周りはとつくに真つ暗だ。なので砂漠ももちろん寒い。とりあえず、それは置いといてリエルには「暗闇で帰れるのはナルガクルガだけだし、この暗闇で落ちたら死ぬのは僕達だ。だから、僕のスキルでこの大型モンスターと友達ゲット（強制スキル）すれば完全に帰れるだろ？それにリエルみたいな美人と1晩所か2晩も一緒に居れるなんて幸せだしね！」と、寝られてなくてテンションがおかしい僕は言ってしまった。え？いつもおかしいって？知ってるよ！…と、そんなことを知らないリエルは顔を真つ赤にしなから俯いた。そして小さな声で「月彗め…まさか…に…するなんて…私は…なんて…」と、途切れ途切れに何かを言っていた。頑張って解読しようとしてリエルを見つめていたら急に顔を上げて僕に向かいながら「不束者ですがどうぞよろしく願います」と言われた。

僕は固まった。そして気付く。また勘違いをさせているのかと。正直に言うところはどうなつて勘違いをするのかは分からないが、確実に勘違いをしていることだけは分かった。なので説明をすると、またもやりエルは顔を真つ赤にして崩れ落ちた。しかし今度は直ぐに立ち上がり僕に向かって一言。「私は月彗に惚れた！だからいつかは私に振り向くように頑張る！だから…だから！待っててください！」と。

僕はまたもや固まった。そして泣き崩れた。それは、僕が好きと言ってくれたのはり

エルが初めてだった。まだ好きなんて感情は分からない。だが、僕を見て、僕のことを愛してくれてるといふひとが明確に分かる物を僕にくれた。一番欲しかった感情^もを。

僕は親は知らない。だが、僕にはモンスターがいた。最初はこの：。喋っている言葉も分からなかった。これは、本当に最近になって覚えたものだ。だが、感情だけは何一つ教えて貰えていない。だから、感覚だった。嬉しい怒り哀しい楽しい：。これは直ぐに分かった。その他も分かった。だが、愛情だけは分からなかった。例の村の女の子も僕を好いてくれているのは分かる。だが、それは、LoveかLikeかは分からなかった。だが、リエルだけは僕の目を見てしつかりと言ってくれた。まだ、よく分からないけど僕はリエルの人生に。リエル自身に興味を持った。我ながらチヨロいなあ：。と思つてしまった。落ち着いて涙が消えた頃、リエルをしつかり見た。目を見て、キリツとした顔のつもりで。したらリエルはあたふたしていた。そして落ち着いた頃にはリエルもキリツとした顔をしていた。頬を赤く染めながら。そして僕は言った。「僕には、好きという愛情が分からない。だけど、リエル。君にはとても興味が湧いたよ。君の告白には直ぐには答えられない。だが、いつかは答える。だから僕も待つていて欲しい答えが見つかるまで。そして確信した。最低かもしれない。罵つてくれてもいいが、君の他にも僕を好いてくれている人がいるのが。僕はまだ決められない。だから待つていて欲しい。」と。

リエルは微笑みながら僕を諭すように言った。「はい。待ちます。いくらでも。何年でも。決められない？なら他も手に取ってください。私はあなたに愛されて、好きで居られるならいくらでも待ちます。あなたが望むなら多くの人の手を取って愛してあげてください。」と、寛容にいてくれるらしい。なので僕もよく考えて見ることにした。ここからの会話はなく気がついたら朝を迎えていた。登る火を見ながら、これからを考えることにした。

〈To Be Continued〉